

Title	メソイオン化合物の合成と反応
Author(s)	浜口, 正史
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/31749
DOI	
rights	
Note	

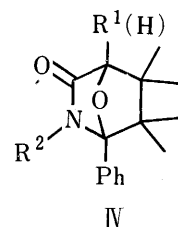
Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ていた付加物 (III) を単離することができた。これは II が反応性に富むこと、および付加物からのイソシアネートの脱離しにくさに依存していることが明らかになった。

3, 4) II_a はオレフィンに対しても 1, 3-双極子付加反応をして、立体特異的に付加物を与えた。II_a はチオカルボニルイリド類似体、アゾメチンイリド類似体に比して、非常な反応性を示した。又、II_a は Sustman の分類の Type I の 1, 3-双極子であることがあきらかにされた。5 位が水素になったイソミュンヒノン (II_b) との反応を行った。この場合は、付加物の構造が NMR のカップリング定数から容易に決定できることから、特に非対称オレフィンとの 1, 3-双極子反応を行った。この付加の配向性の問題が Houk の取り扱いによって、1, 3-双極子の HOMO と親双極子剤の LUMO との相互作用により説明することができた。

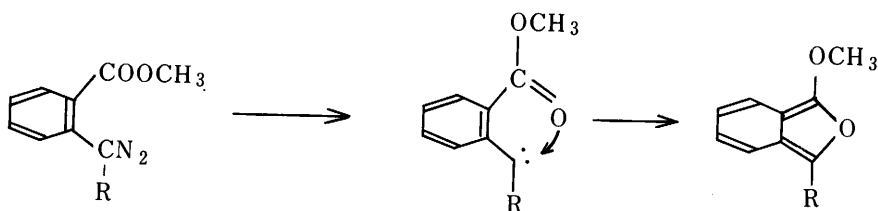
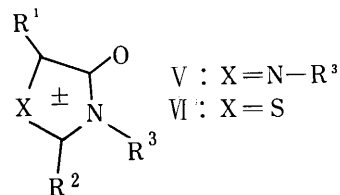
5) II_{a, b} はカルボニル化合物に対しても 1, 3-双極子付加反応をすることがわかった。しかもカルボニルの置換基によって付加の配向性が変わることがあきらかにされた。



6) メソイオン化合物において、環内ヘテロ原子により反応性が大きくかわることから、イソミュンヒノンの環外ヘテロ置換基の効果を調べた。1, 3-双極子付加反応の反応性は 2-位の置換基が $\text{Ph} > \text{OCH}_3 > \text{N}(\text{CH}_3)_2$ になるにしたがって低下することが明らかになった。

7, 8) II_{a, b} の合成に用いたカルベンの分子内反応を改良して、メソイオン性イミダゾリウムオキサイド (V), 1, 3-チアゾリウム-4-オキサイド (VI) の合成法について述べた。

9) カルベンの分子内反応は脱離基が不活性な窒素であるために反応性に富む反応種を合成するのに適していることから、その方法の拡張として、1-アルコキレイソベンゾフランの生成と反応を行った。



論文の審査結果の要旨

メソイオン化合物は複素環化合物の一種であり、単一の結合構造式では表現できず、分極構造を含むいくつかの結合構造の共鳴混成体と考えられるもので、6π電子芳香族性と大きい双極子モーメン

トをもっており、構造上も反応性の面でも興味ある化合物である。

シドノンの発見以来、5員環のカルボニル基から3の位置（正荷電をもつヘテロ原子）がNのものは数多く合成されたが、ほかには3位Sのものが一例単離されたのみで、3位Oのものは未だ単離に成功していなかった。

浜口君は3位がN, S, Oとなるにつれ環が不安定となり反応性に富むと考えて、従来の合成法と異なる新しい合成法を開発して、3位Oの1,3-オキサゾリウム5-オキシドの合成単離に成功した。すなわちジアゾイミドを銅アセチルアセトナトの存在下ベンゼン中で加熱することにより窒素を脱離して閉環させるもので、反応中に生成するカルベンの分子内反応を巧みに利用したものである。

浜口君はこの新化合物と水、アルコール、親電子的オレフィン類、アセチレン類との反応を詳細に研究し、これが予想通りN, S同族体にくらべ反応性に富み、SustmanのType Iの1,3-dipoleに属し、そのHOMOと相手のLUMOの相互作用によるシクロ付加を行うことを見出した。

またこの新合成法を応用してメソイオン系のイミダゾリウム-4-オキシド類、1,3-チアゾリウム-4-オキシド類を合成し、さらに反応性に富むアルコキシイソベンゾフランの合成にも成功した。

以上のように浜口君は反応性に富むメソイオン化合物やヘテロ環化合物の合成に分子内カルベン-カルボニル反応を応用した新合成法を見出し、またメソイオン化合物の反応機構を明らかにした。よって理学博士の学位論文として十分価値あるものと認める。